

第三省察における観念の「質料的虚偽」

松 枝 啓 至

はじめに

デカルトの第三省察における神の存在証明の論証においては、周知の通り様々なロジックが盛り込まれており、それぞれの内実については綿密な検討を必要とする。とりわけ「観念」という用語に織り込まれている意味内容を明らかにすることは、デカルトの論証を読み解く上で必須の作業であろう。本稿ではそのような「観念」に関わる重要なトピックの一つとして、観念の「質料的虚偽 (*falsitas materialis*)」の問題を取り扱う⁽¹⁾。これは第三省察においてそう頻繁に言及されているわけではないが、これについての考察を通じて、第三省察の論証構造、さらには『省察』全体の論証構造（とりわけ「順序」）を解き明かすための一助としたい。

観念の「質料的虚偽」とは、第三省察のデカルトの論述によれば、次のようなものである。つまり、虚偽そのものは本

来「判断 (*judicium*)」に属するものであり、観念そのものを「私の思维の何らかの様態として考察するだけで、それらを何か他のものに関係付けないのならば、それら「観念」が私に何らかの誤謬の材料を与えるということとはほとんどない (*videmus nullam errandi materiam dare possent*)」(AT, VII, 37)⁽²⁾。ただし、「ものでないものをあたかももののように表現する場合には (*cum non rem tanquam rem representant*)、観念の内には他の何らかの質料的虚偽がある」(AT, VII, 43)とされる。

このような虚偽があるのかどうか、おもに第四反論と答弁においてアルノーとデカルトの間で議論が行われるのであるが、興味深いのはデカルトがこのような観念の「質料的虚偽」を論じる際に用いる具体例である。つまりデカルトは熱さと冷たさの観念を挙げ、それらがほんの少ししか明晰かつ判明であるにすぎず、冷たさは熱さの欠如なのか、あるいはその

逆か、あるいは双方とも実在的な性質なのか分からない、と論じている。熱さや冷たさの観念は感覚についての観念であり、第三省察で神の存在証明がなされた後、第六省察での議論の枠組みにおいては、外的事物とわれわれの身体との相互作用で生じる観念であろう（つまり外的事物の存在を前提とした、自然科学的な枠組みで説明される）。しかしながらこの観念の「質料的虚偽」が語られるのは、まさしく形而上学的な議論である神の存在証明においてなのである。つまりここでは、デカルトの「私の把握に関する順序 (*ordo ad meam perceptionem*)」^③においては「精神の外」がまだ未確定であり、むしろその「精神の外」がそもそも何らかの形でありうるかどうか論じられている。したがってこのような文脈で観念の「質料的虚偽」なるものを論じることが妥当であるのかどうか、が問題となりえよう。つまりここでは、『省察』全体の論証構造がいかなるものであるか、が問題となるのである。

本稿ではまず観念の「質料的虚偽」に関わる議論をまとめ、この観念についての意味内容を明確にすることを試みる（第一節から第三節まで）。とりわけ『省察』の叙述では、「観念」と「判断」との境界線が曖昧な部分がある。そのことが「虚偽」の意味内容を不明確にしている場面もあろう。また『省察』では、「質料的」という用語が文脈に応じて少なくとも二通りの意味で使用されていると考えられる（特に第四答弁）。そのような叙述はデカルトの言う「質料的虚偽」の意味内容に誤解を与えかねない。したがって、「質料的虚偽」

という概念を理解する上でそのような誤解を招きやすい記述を、本稿前半では解きほぐす。そして本稿第四節では、このような「質料的虚偽」の議論が第三省察で展開されることは是非について、デカルトの『省察』全体での方法論も踏まえながら論じる。

一 「質料的虚偽」への言及

まずは第三省察においてデカルトが観念の「質料的虚偽」について論じている箇所を確認しておく。この概念は神の存在証明に関わる議論の中で現れてくる。デカルトは一番目の神の存在証明を行っていく際の準備として、「私」の思惟のすべてを二つの種類に分類した後、二番目のものの内の「判断」に関連して次のように述べる。つまり、「観念に関する限り、観念はそれら自身だけで観られ、私がそれらを他の何かに関係付けることがなければ、元来偽であるということはありません（*falsae proprie esse non possunt*）」^④。したがって「私が単に観念そのものを私の思惟の何らかの形態として考察するだけで、それらを何か他のものに関連付けたいのならば、それら「観念」が私に何らかの誤謬の材料を与えるということとはほとんどありえない」（以上 *AT, VII, 37*）のである。

このようにデカルトによれば、観念そのものを思惟の様態^⑤としてだけ捉え、他のものに関連付けたいならば、観念が誤謬の材料 (*materia*) を与えることは、「ほとんど」ありえない。周知の通り第三省察では、「観念」は狭い意味で捉えられており、つまりいわば「ものの像」のことであって、

意志や感情や判断といった他の「思惟」からは区別されている。しかし第二答弁に付された「諸根拠」の定義Ⅱによれば、観念ということでデカルトは「任意の思惟の形相——その直接の把握を介して当の思惟そのものを私が意識する、その形相——を理解している」(AT, VII, 160)。またホッブズの第三反論に対する答弁においても、デカルトは「観念という名称を精神によって直接的に把握されるものすべてとして解している」(AT, VII, 181)のであって、さらに「私が欲しあるいは恐れるという場合には、それと同時に私は私が欲しあるいは恐れているというものを把握しているので、まさしくこれらの意志作用と恐怖そのものも、私によって観念の内に数え入れられる」(同上)、とも述べている。

このようなデカルトの叙述を考慮に入れると、観念の内に表現される内容はどこまで認められるのかも問題となろう。つまり概念的なもの、あるいは命題的なもの(S(例えば「SはPである」という判断)も観念の表現内容として認められるとすれば、上記の引用箇所のような、観念それ自体だけで観られる場合は偽でありえない、という議論は成り立たない。したがってのちの第四省察の真偽論が意味のある議論となるためには、この第三省察での観念は、あくまでも「ものの像」という狭い意味での観念として捉えられねばならないだろう(この点は本稿第二節で改めて論じる)。

さてデカルトは上記のような叙述(AT, VII, 37)の後、ある箇所では物体的なものの観念について吟味している。その作業のさなか、デカルトはまず、「例えば光や色、音、香り、味、

熱さ、冷たさ、およびその他の触覚的な諸々の性質など」について、「全く大いに混乱して不明瞭に(*confuse & obscure*)しか私によって思惟されない」と指摘する。したがって「それらについて私が持っている観念が何らかのものの観念(*verum quarundam ideae*)であるのか、ものでないもの(*non rerum*)」観念なのか、を私は知らない」し、なぜなら確かに「ものでないものをあたかももののように表現する場合には、観念の内には他の何らかの質料的虚偽(*falsitas materialis*)がある」(以上、AT, VII, 43)のである。

つまり先の引用箇所(AT, VII, 37)とは異なり、この箇所(AT, VII, 43)においては、場合によっては観念そのものにおいても虚偽があることが指摘され、それを「質料的虚偽」とデカルトは呼んでいる。彼がここで具体例として挙げるのは、熱さと冷たさの観念である。デカルトによれば、それらはほんの少ししか明晰かつ判明であるにすぎず、そのせいで冷たさそのものは熱さの欠如なのか、あるいはその逆か、あるいは双方とも実在的な性質なのか、われわれには分からない。仮に冷たさそのものが熱さの欠如でしかありえないのなら、冷たさそのものを実在的で積極的な何ものか(*reale quid & positum*)として表現するような観念は、明らかに虚偽を含んでいることになる(以上、AT, VII, 43-4)。

この箇所では、観念そのものが虚偽と言われているのだろうか。あるいはあくまで「ものの像」としての観念そのものは虚偽ではなく、ある観念についてさらなる「判断」を下す際に虚偽の可能性を与えるという意味であらうか。デカルト

は「観念を何か他のものに関連付けないのなら、観念が私に何らかの誤謬の材料を与えるということはほとんどありえない」(AT, VII, 37: 傍点引用者)と述べているし、「観念はそれら自身だけで観られ、私がそれらを他の何かに関係付けることがなければ、元来偽であるということはありえない」(同上)とも述べている。したがってここでは観念そのものが虚偽であるというよりも、虚偽の「判断」を下しうる可能性を生じさせる原因が観念の表現内容にありうる、ということとして解釈できる。

しかしながらここで観念に表現される内容について真や偽が言われうるのには、どのような枠組みが必要なのであろうか。周知の通り「観念」という用語は『省察』本文に限っていうなら第三省察になって初めて導入される。そしてそこでの観念は、方法的懐疑を遂行した結果、精神内の存在として指定され、外的事物との関係を全く絶たれている。このことは『省察』という書物の性格上至極当然のことである。つまり第一・第二省察においてデカルトは、感覚から得られる知識をはじめ自然学、天文学、医学、果ては数学までをもわれわれの知識から斥けてしまっているからである。ただしデカルトが観念の「質料的虚偽」を論じる際に持ち出す熱さと冷たさの観念は、まさしく感覚から得られると想定されているものである。第三省察でデカルトは冷たさが熱さの欠如なのか、その逆なのか、分らないと述べているが、そのように言えるためには、「観念」というものを含むわれわれの認識の枠組みは、外的事物との関係を全く断たれたままで成立す

るのだろうか。あるいは外的事物の存在を前提とした、自然的な認識理論の枠組みが必要となるのだろうか。この点については改めて本稿第四節で論じることにする。次節では本節に関連して、観念の明晰判明性とデカルトの判断論について考察を深める。

二 観念の明晰判明性と第四省察における判断論

感覚に関わる観念については、前節末尾で言及したような問題が残ると考えられるが、それとは別に、この観念の「質料的虚偽」の問題には、観念の有する明晰判明性も関連している。第三省察における第一の神の存在証明のすぐ後、デカルトは神の観念が質料的に偽であることはない、と断言している。つまりデカルトによれば、「神の観念は最高度に明晰かつ判明であって、他のいかなる観念にもまして、より多くの表現的实在性を含んでいるのであり、神の観念よりもそれ自身によっていつそう真である観念は何もないし、そこにおいて神の観念よりも虚偽の疑いがより少なく見出されるものは何もない」(AT, VII, 46)のである。

この記述からも明瞭に見て取れるように、観念の「質料的虚偽」の重要な要素は、その観念がわれわれにとって明晰かつ判明に把握されるかどうかである。この明晰かつ判明であることは、いわゆる明証性の一般的規則(AT, VII, 35)に関わるものである。この明証性の一般的規則に適うものの一つが神の観念ということになる。この明証性の一般的規則にはいわゆるデカルトの循環という問題がついて回るが、本

稿では趣旨も異なるのでそれについては論じない(6)。

さて観念の「質料的虚偽」に専ら関わる感覚的諸観念については、先述の引用箇所(AT, VII, 43)にあるように、概して「混乱して不明瞭」であり、明晰かつ判明な真であるものには当てはまらない、とされる(7)。ここでの「混乱して不明瞭」とはいかなる事態であろうか。例えば『哲学の諸原理』第一部第五節において「明晰な把握(perceptio clara)」と「判明な把握(perceptio distincta)」について簡潔ながら言及がある(AT, VIII, 21-2)。さらにデカルトは続く第四六節で、例えば身体のある部分に痛みを感じる場合、この痛みの把握は極めて明晰でありえるが、判明であるとは限らない、と述べている。なぜなら痛みを感じている人は、明晰に把握しているのは痛みの感覚だけなのに、この感覚に類似したものが傷んでいる部分に存在すると(誤って)思ってしまうからである(AT, VIII, 22)。このような叙述を考慮に入れると、「明晰ではあるけれども判明ではない」観念も、「混乱して不明瞭」な、「質料的虚偽」を伴う観念と言えよう。つまり上記の例で挙げられている痛みの観念は、痛みがどこに存しているか、という判断に対して誤謬の材料を与えるからである。しかし痛みの感覚(観念)そのものは虚偽ではなく、痛みの感覚に関わる様々なことを思惟する(判断する)際に誤謬が生じる可能性が出てくる。では「観念」とは区別される「判断」とは何であろうか。

デカルトは「判断」における過誤については、第四省察でまず「過誤(error)」とは純粹な否定ではなくて、欠如であり、

言ってみれば私の内で何らかの仕方であるべきものについての認識の欠乏なのである」(AT, VII, 54-5)、と述べている。ではそのような過誤は具体的にどのような仕方で生じるのか。それは周知の通り、「意志が知性よりも広い範囲に及ぶために、私が意志を知性の範囲の内にとどめておかずに、しかしまた私が理解していないものにもまで意志を拡張する、という一つのことから生じる」(AT, VII, 58)のである。このようにデカルトの叙述からすれば、「判断」における過誤とは、知性と意志がそれぞれ及ぶ範囲がうまく重ならない時に生じるものである。熱さや冷たさの観念の場合言えば、熱さや冷たさの観念を生み出す原因が何であるかを知性が把握していないのに、「熱さは冷たさの欠如である」、あるいは逆に、「冷たさは熱さの欠如である」といった命題に意志が是として同意してしまう。そのような際に誤謬が生じうるのであり、その場合でも感覚している冷たさの観念(感覚像)や熱さの観念(感覚像)そのものが変容するというわけではない。あくまで誤謬が生じる(あるいは生じない)のは、そのような冷たさや熱さについての「判断」、つまり別の思惟(概念的なものを含む)において、ということになる。

しかしそのような「判断」という思惟は、例えばこの上なく「明晰かつ判明」な観念とされていた、上述の神の「観念」と種類が異なるのであろうか。神の観念はもちろん、熱さや冷たさの観念と異なり、感覚像といったものではない。デカルトが「神」という言葉でもって理解しているものは例えば、「無限であり、独立していて、最高に知性的で、最高に能力

があり、私自身やその他の存在するものは何であれ、それらを創造したところの実体」(AT, VII, 36)である。つまりどちらかというと概念的、命題的な観念と呼べよう⁸⁾。そのような種類の観念に対しては、やはり観念そのものに対して虚偽が言いうるのではないだろうか。このような問題も踏まえた上で、次節では、観念の「質料的虚偽」について明確な形で論じたアルノーの第四反論とそれに対するデカルトの答弁を参照し検討する。

三 アルノーの反論とデカルトの答弁

第三省察で言及される観念の「質料的虚偽」に関して、アルノーは『省察』第四反論で次のように批判している。つまりまず、「積極的な観念によって表現されている (*idea positiva representari*) と私が思いなしている、その冷たさが、積極的でないと仮想されえるとしても、しかし積極的な観念が、実在的で積極的な何ものをも私に表現しない (*nihil reale & positivum mihi exhibere*) とは仮想されえない」。なぜならば「観念は、それが思惟の様態として有している存在 (*esse quod habet tanquam modus cogitandi*)」によって、積極的であると言われる「わけではなくて、積極的であるという理由は、「観念が有している、われわれの精神に表示している、表現的存在 (*esse objectivum quod continet & menti nostrae exhibet*)」由來する」からである。それゆえに、「その観念は冷たさの観念ではない」ということはありえても、偽ではありえない」(以上、AT, VII, 207)のである。

ここでアルノーは、デカルトが第三省察の神の存在証明において議論を進めていく際に重要視している、観念の「表現的実在性 (*realitas objectiva*)」(アルノーは「表現的存在」と言い換えている)に注目している。デカルトによれば、それぞれの観念はそれが思惟の様態である限りでは、何ら差がないとされる。それぞれの観念に差をもたらずのは、つまり観念においてその表現される内容に差をもたらずのは、観念が有する「表現的実在性」である。そしてここでアルノーは、この「表現的実在性」こそが、観念が精神に対して積極的で実在的なものを表現する原因であると捉えているのである。

上述の引用箇所が続いてアルノーは、「あなた『デカルト』が質料的に虚偽であると言う冷たさの観念は、あなたの精神に何を表示するのでしょうか(同上)と問う。そしてアルノーは、それが「欠如」だとすれば、「その観念は真」であり、「積極的な存在」だとすれば、それは「冷たさの観念ではありません」(同上)と述べている。つまり「欠如」ということに関して言えば、最終的に外的事物との関係で冷たさと熱さそのものについて判断する場合、冷たさは熱さの欠如(より詳細には微小粒子の運動の程度が小さいということ)と捉えられることになる。したがってその意味では冷たさの観念は真であると言えよう。しかしこれは第三省察や第四省察のデカルトの認識理論の枠組みでは、まさしく「判断」のレベルでの真である。またもし冷たさの観念が積極的で実在的なものを表示しているとすれば、実在的には欠如態である「冷たさ」を表示しているわけはなく、それは冷たさの観念ではない、

ということになろう⁹⁾。つまり端的に言えば、デカルトは観念と判断とを混同している、とアルノーは指摘しているのである。

ではこのようなアルノーの批判に対してデカルトはどう答弁しているだろうか。まず『省察』の「読者への序言」で言われるところの観念の「表現的 (objective)」な側面に関しては次のように述べている。「というのも、観念そのものは、何かしらの形相であつて、いかなる質料によつても構成されてはいない (*ipsae ideae sint formae quaedam, nec ex materia componentur*) のですから、何らかのものを表現するという限りでは、観念が考察されるそのたびごとに、観念は質料的、ではなくて、形相的に受け取られるのです (*non materialiter, sed formaliter sumuntur*)」(AT, VII, 232)。ここでは「読者への序言」で言われるところの観念に関する「質料的」という用語(本稿註④参照)に對比して、「表現的」ではなく、「形相的」という用語が使用されている。第二答弁の末尾で「観念」という用語を定義する際にも、デカルトは観念を「任意の思惟の形相―その直接の把握を介して当の思惟そのものを私が意識する、その形相」(AT, VII, 160)と解していた。

デカルトはさらに第四答弁で続けて、「もし観念が、これやあれを表現しているということに应じてではなくて、ただ単に知性の働きであるということに应じてのみ、見られるとしたならば、それらは質料的に受け取られている (*materialiter sumi*)」と言われる」(AT, VII, 232)と述べている。このよう

な叙述は「読者への序言」のものと矛盾してはいないし、第三省察で狭い意味での「観念」と「判断」とを区別した箇所(AT, VII, 37)とも整合的であるだろう。デカルトはこういったことを今一度確認した上で、「既に私が説明した意味以外の意味で、観念が質料的に偽であると言われうるとは私には思えない」(AT, VII, 232)とし、再度観念の「質料的虚偽」がいかなるものかを説明している。つまり、「冷たさが積極的なものであろうとも、あるいは欠如であらうとも、それゆえに冷たさについての別の観念を私が有するわけではなく、私の内には、いつも私が持っていたのと同じ観念が留まっている」。そして「このような冷たさの観念そのものが、私に過誤の素材 (*materia*、質料) を、もし冷たさが欠如であつて熱よりも多くの实在性を有していないということが真であるとするならば、提供することになる」(以上、AT, VII, 232-3)。

ここで述べられている観念の「質料的虚偽」であるが、このときの「質料」なる用語は上述の引用箇所(AT, VII, 232)での「形相的／質料的」の用法とは異なるようである¹⁰⁾。というのもデカルトが例に挙げている、冷たさと熱さの観念の場合、それらが実際は何を表現しているのか不明瞭(つまり「明晰かつ判明」ではない)であり、それゆえ判断における過誤の素材(質料)を私の精神に提供していることになる。つまりここでは、観念そのものの素材・質料(この場合観念は精神の一樣態であり、在り方として精神に属する)ということと対比的な意味合いで言われていた、観念の形相的(表

現的)な側面が、判断における虚偽の機会を与えているということになる。

このように「質料的」という用語の意味合いに関しては誤解を招きやすい表現がここではなされており、そのことも上述のようなアルノーの批判が生じる一因であろう。しかしながら、その点を除けばデカルトの論述は第三省察での叙述と首尾一貫していると捉えられる。つまりたびたび例として挙げられている冷たさや熱さの観念とは、認識者がまさに感じているところの「冷たさ」や「熱さ」という感じであり、それがどのようなものの性質であるとか、その感じが生じる原因が何であるとか、そのような表現内容(判断内容)を含まないものとなる。ただし先にも述べたように、そのような「観念」といわれる「判断(概念的なもの)」との境界は曖昧であり、その点でデカルトが言うところの観念の「質料的虚偽」が十分な機能を果たす概念であるかは、議論の余地があると言える。

四 観念の「質料的虚偽」の文脈

前節までで確認してきたように、第三省察で導入された観念の「質料的虚偽」という概念に関しては、その内容そのものについて曖昧な部分が残し、明快なものとは言えないかもしれない。その問題もさらに考究すべきであるが、本稿では最後に、第三省察で観念の「質料的虚偽」が導入されることそれ自体について考察を深めたい。つまり第三省察の神の存在証明というごく形而上学的な議論が行われている中で、観

念の「質料的虚偽」が言及されており、その具体例としては感覚についての観念、冷たさと熱さの観念が取り扱われている。第三省察は方法的懐疑のプロセスを経て、感覚的なもの、外的世界についての知識・意見全体が退けられたままの状態である。その段階で感覚的なものの観念を取り上げて、その「質料的虚偽」に言及することは妥当であろうか(1)。

上記のような問題を論究する上でまずは、デカルトが「省察」において論述を行う際の「順序」がどのようなものであるのかについて確認する。デカルトは「省察」第二答弁の末尾において、自身の方法(いわゆる「分析(analysis)」)について論じているが、そこでデカルトは幾何学的な叙述様式において順序(ordō)と証明の方法(ratio demonstrandi)とを区別する。ここで彼の言う「順序」は、「最初に提示されるものが、後続するもののいかなる援助もなしに認識されねばならず、そして残りのすべてのものが、ただ先行するもののみによって証明されるように、そういうふうに配列されていなければならない(AT, VII, 155)」という性質を有している。そしてデカルトは「省察」において自分はこの順序にできる限り厳格に従った、と述べている。その証拠として彼は、自分が身体からの精神の区別を第二省察ではなく第六省察において取り扱ったことを挙げている。

また、「順序」ということで重要となるのは、「省察」の「読者への序言」で言及されている「私の把握に関する順序」である(本稿註3を参照)。この概念は「方法序説」に対してなされた反論についてデカルトが応じている文脈の中で現れ

てくる。そのようなデカルトの回答から明らかになるのは、『方法序説』の特に第Ⅳ部における論じ方は、「ものの真理に關する順序・秩序」に従って書かれたものではなく、「私の把握に關する順序・秩序」に則って叙述されたものであるということである。そしてさらに『方法序説』の第Ⅳ部、すなわち形而上學に關わる議論を深めたものである『省察』もこの同じ「私の把握に關する順序・秩序」に従って書かれている、ということが明らかになる。つまりもし『省察』が「事物の真理に關する順序・秩序」に則って書かれたのであれば、神の存在から「私」の存在へ、さらには物体的事物の存在へと論証が進められるであろう。しかし周知の通り實際の『省察』の流れは、『省察』本文の議論から明らかなように、まず方法的懷疑を通して疑っている「私」にとつて、最初に最も確実な疑いえないものとして「私はある、私は存在する(Ego sum, ego existo)」が知られる、ということから始まっている⁽¹²⁾。すなわち「私」の存在が発見され、そこから神の存在へ、そして物体的事物の存在へと議論は進んでいる。

さて、『省察』におけるこのような「順序」を考慮すると、最終的には物体的事物との關係で「私」の精神の内に生じると判明する感覚的なものの觀念は、物体的事物の存在そのものがまだ確保されていない第三省察においては、どのように捉えられるべきだろうか。例えばペイサードは、「自然科学的な著作、例えば『世界論』は物理学的な真理に始まり、その後で物体的事物によって精神の内に生み出される様々な觀念に向かうが、形而上學的探究は反対のやり方で進行せねば

ならない」と強調している⁽¹³⁾。つまり形而上學的な議論が展開されている第三省察などでは、例えば冷たいという感覚、すなわち冷たさについての唯一の最初の觀念が捉えられ論じられる。そしてその後で、この觀念を生み出す真なる物理的性質について探求されることになる。したがって第三省察で觀念の質料的虚偽が論じられるのも、感覚についての諸々の觀念がどのようなメカニズムで生じるのかということは問われないまま、という状況の下である。

アラネンもペイサードを参照しつつ、「問題は、「中略」冷たさの觀念を引き起こしたもののについての本性や科学的説明——つまりそれが欠如であるかないか——に關わるということではない」と言及している⁽¹⁴⁾。本稿第三節で『省察』第四反論と答弁におけるアルノーとデカルトのやり取りを参照したが、そこでも冷たさの觀念について、アルノーは特に「欠如」や「積極的な存在」ということを論じ、その点からデカルトの言う「質料的虚偽」を批判していた。確かにこのやり取りは『省察』本文の叙述内容(とりわけ外的世界の存在が確保される第六省察の叙述)を踏まえた上での議論であり、その限りではアルノーの批判的射た部分もある。ただしペイサードやアラネンが指摘するように、デカルトの「順序」に従えば、第三省察はそのような感覚的なものの觀念についての、それを引き起こす原因(あるいはそれについての自然科学的説明)が論点となる箇所では確かにない。

しかしながらそのような第三省察という状況に限ってみても、かつ先述のようなデカルトの「順序」に従ったとしても、

第三省察で導入される観念のこの「質料的虚偽」というものが議論として成立するためには、精神の内部という枠組みの形而上学的な文脈のみでは不十分だと考えられる。つまり冷たさや熱さの観念について言えば、その「冷たさ」や「熱さ」の感じについては明晰であるわけだが、それ以外のこと（例えばその「感じ」が生じる原因）については判明でないわけ、その点において虚偽が生じうる。ただその場合の「判明でない」、あるいは「虚偽が生じうる」と言えるためには、その文脈としての外的世界の存在を前提とした、自然科学的な何らかの理論の枠組みが必要ではないだろうか。

ゲルが適切に指摘するように⁽¹⁵⁾、第三省察の神の存在証明のプロセスにおける「観念」に関しては、二通りの捉え方ができよう。つまり一方は、観念の真理性はそれが表現しているものの実在性に服するという（心理学的な）捉え方であり、他方は、ものの存在は生得的な観念に服す、という（数学的な）捉え方である。先述の『省察』全体における「順序」という観点からすれば、後者の捉え方が順当なものとなるだろうが、第三省察におけるこれら二つの捉え方の混在は否定できない。

本稿第二節で論じたように、「質料的虚偽」に関わる感覚諸観念は、デカルトによれば「混乱して不明瞭」であるわけだが、それはある種明晰に把握される熱さや冷たさや痛さの「感じ」としての観念に対して、さらなる判断を加えようとするときにそういう事態になってしまう。つまりそのような「ものの像」としての観念に何らかの思惟の様態として以外

のものを関係付けるならば、たちまち混乱して不明瞭なものとなってしまふ。しかしながらここで注意すべきは、そのようにある観念が混乱して不明瞭なものになってしまう背景として、まさしく何らかの思惟の様態として以外のもの、つまり精神以外の実体の存在がすでに想定されていなければならぬ。そういったものの想定がそもそもののであれば、観念における明晰判明性は問題とはならないだろうし、「質料的」という限定付きとはいえ、虚偽ということも論じられることはないだろう。つまり「観念」に関わるすべての議論が精神内部的な文脈で片が付くのであれば、「観念」それ自体は偽ではありえないのだし、虚偽が議論の的となることはない。しかしながら「質料的」という限定付きであれ虚偽が論じられるためには、その他の文脈（本稿ではそれを自然科学的文脈と一貫して呼んでいるが）が前提とされていなければ、議論として成立しない。

第三省察の神の存在証明の論証は、そもそも精神としての「私」以外のものが存在するかどうかという探求の途上で論じられるものであるわけだが、観念の「表現的実在性」やいわゆる「因果性の原理」などと同様に、「質料的虚偽」という概念も精神以外のものの存在を前提して初めて成立するのではないだろうか。もちろんデカルトの「順序」からすれば、このことは前提されてはならないのであるが。また、このような論証構造は第一省察の懐疑のプロセスにも見受けられるものであり⁽¹⁶⁾、デカルトの「順序」というものに厳密に従おうとするならば、デカルトの論証にはある種の循環が生じ

てしまうことになろう。しかしながらこの事態はデカルトの論証の欠陥というよりは、哲学的論証における避けがたい性質の一つと言えるのではないだろうか（ある種の解釈学的循環）。無論この事態は、デカルトが採用した「方法」と「順序」にはそぐわないものであろうが。

以上のように本稿では観念の「質料的虚偽」を巡る幾つかの議論を検討してきたが、とりわけ第四節で論じてきたように、この「質料的虚偽」という概念がデカルトの論証の中で効果のある役割を果たすためには、デカルトの論証の「順序」がそれほど単純で明確なものでないことが示されよう。つまりデカルトの論証は、形而上学的文脈と自然科学的文脈が複雑に入り混じって成立している、ということの一端が示唆されたと考える。

【註】

(1) 観念の「質料的虚偽」については数々の研究論文があり、本稿ではそのすべてを網羅的に参照しつつ論じるということとはできない。本稿の議論に関連するものを適宜註などで言及していくことにする。最近のものでは次の論文において、この問題についての全般的な議論がうまく整理され論じられている。Deborah J. Brown, 'Descartes on True and False Ideas', in Janet Broughton & John Carriero (eds.), *A Companion to Descartes* (Blackwell Publishing Ltd, 2008), pp. 196-215. また次の著作においては、観念の「質料的虚偽」の問題も含めて、

感覚的なものの観念の表現的側面に関わる様々な問題が詳細に論じられている。Raffaella De Rosa, *Descartes and the Puzzle of Sensory Representation* (Oxford: Oxford University Press, 2010). さらに『省察』第二版の出版の三五〇周年を記念して一九九二年に開催されたコロキウムでの発表論文を集めた次の書籍においても、「質料的虚偽」の問題について論じられている箇所がある。Jean-Marie Beyssade et Jean-Luc Marion (éds.), *Descartes: Objecter et Répondre* (Paris: PUF, 1994), pp. 187-246.

(2) 本稿では、デカルトの著作からの引用はすべてアタダン・タヌリ版『デカルト全集』(*Oeuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 11 vols, 1996) に依拠している。ローマ数字は巻号をアラビア数字は頁数を表す。例えば「AT, VII, 35」は「マダン・タヌリ版デカルト全集第七巻三五頁を表す」。

(3) この表現は『省察』の「読者への序言」における次の記述に由来するものである。「私はまたそこでもその真理そのものに関する順序・秩序において (in ordine ad ipsam rei veritatem) それらのもの「魂の本質に属すると言われたい他のすべてのもの」を排除しようと欲したのではなく「その真理についてはあいにくその時論じたのではない」、しかしただ単に私の把握に関する順序・秩序において (in ordine ad meam perceptionem) のみ排除しようと欲したのである」(AT, VII, 8)。

(4) デカルトは『省察』の序言で観念について両義性があると述べている。デカルトによれば「観念」という語は、「一方で質料的に (materialiter)」、知性の作用として (pro

operative intellectus) 解されることである」(AT, VII, 8)。
すなわちこれが思惟の形態として捉えられる観念である。
また観念は「他方で表現的に (objective) ‘そうした作用によっ
て表されたものとして (pro re per istam operationem
representata) 解されることである」(同上) である。

(5) D. T. J. Bailey, *Descartes on the logical properties of ideas*,
British Journal for the History of Philosophy, vol. 14 (3) [2006],
pp. 401-11. この論文では、デカルトの議論においては「観念」
の真偽と「判断」の真偽について首尾一貫していないの
ではないかと疑問が呈され、その一因として、観念がいわゆる
命題的なものも、命題の要素となるものも、どちらも表
現してしまっていることが指摘されている。

(6) 次の拙著を参照。松枝啓至『デカルトの方法』(京都大
学学術出版会、二〇一一年) 第II部第一章。

(7) Lilli Alanen, *Descartes's Concept of Mind* (Harvard
University Press, 2003), pp. 156-64. この箇所ではアラネンは観念
の「質料的虚偽」が問題となっている文脈は感覚的諸性質
を議論しているところであり、この「質料的虚偽」が観念
の「混乱して不明瞭」であることに起因していると強調
し論じている。

(8) 感覚像的な神の観念、つまり偶像崇拜者の神の観念に
ついては「デカルトは第四答弁 (AT, VII, 233) でそれを「質
料的虚偽」が含まれる観念として言及している。

(9) このように観念が外的事物をどのように「表現する」
のかという問題は、観念の「表現的実在性」と絡めて詳細
に論じられねばならないが、本稿では紙幅の関係上省略す
る。ちなみに本稿註(一)で挙げた、De Rosaの著作はその点

に詳しい。

(10) 次の論文において「形相的」と「質料的」という用語
の意味内容の混乱について、整理されて論じられている。
武藤整司「デカルトにおける『質料的虚偽』概念の検討」(高
知大学学術研究報告「第四一巻(一九九二年)人文科学」
253-64頁)。

(11) 同じような疑問は第二省察後半のいわゆる「蜜ロウの
分析」の議論にも投げかけることができようが、その点は
また稿を改めて論じた。

(12) このような「秩序・順序 (ordo, l'ordre)」という点に厳
格に固執しデカルトの哲学を体系的に論じたのは、周知の
通りゲルである (cf. Martial Guerout, *Descartes selon l'ordre
des raisons* (2vols., Paris: Aubier, 1968 (1953)))。

(13) J. M. Beyssade, *Descartes on Material Falsity*, in Philip D.
Cummins & Guenter Zoeller (eds), *Minds, Ideas, and Objects*
(Atascadero, California: Ridgeview Publishing Company, 1992),
p. 12.

(14) Lilli Alanen, 'Une certaine fausseté maternelle: Descartes et
Amauld sur l'origine de l'erreur dans la perception sensorielle', in
Jean-Marie Beyssade et Jean-Luc Marion (eds.), *Descartes:
Objet et Réponse* (Paris: PUF, 1994), pp. 220-1.

(15) Martial Guerout, op. cit., vol. I, p. 214-216.

(16) この点については拙著『デカルトの方法』第II部第三
章を参照。